

書き損じはがき

どう使われる？

「回収」「世界寺子屋運動」公開講演会

諏訪ユネスコ協会

諏訪ユネスコ協会（矢崎靖 ながきを回収し、途上国の教育
支援に役立てる「世界寺子屋
協会長）は23日、書き損じはがき

運動」に関する公開講演会を諏訪市のRAKO華乃井ホテルで開いた。日本ユネスコ協会連盟海外事業部長の芦田崇さんが講師を務め、現地の写真と映像を交えて解説。さまざまな理由で教育を受けられない子どもや大人に、読み書きや計算などの学びの場を提供しているとした。

諏訪ユネスコ協会は2011年の設立時から同運動を活動の柱に据え、諏訪地方の中小高校に書き損じはがきの回収箱を設置。数年前から公共施設

設や農協の施設などにも置いており、住民に広く運動を知ってほしいと公開講演会を企画した。児童生徒から「より集めるため、回収はがきがどう生かされているか知りたい」との声も寄せられていたという。

芦田さんは世界には読み書きができない大人（15歳以上）が7億人以上いると現状を説明。紛争や貧困、難民化などで教育を受ける機会に恵まれなかったとし、「最低限の読み書きや計算ができないと、社会生活が難しく収入にも響く」と強調した。書き損じ



公開講演会で「世界寺子屋運動」について話す日本ユネスコ協会連盟の芦田崇さん

はがきは新しい切手に交換、その後、資金化され、支援に充てられるという流れを解説。「寺子屋は全ての住民に開かれた多目的センター」とし、これまでに44カ国・1地域で538軒が建設され、約135万人が学びの機会を得たとした。（鮎沢健吾）